

# 言葉について — 声と精神 —

高橋正和

Von der Sprache — die Stimme und der Geist —

Masakazu Takahashi

「人間がかつて地上で考え、欲し、行った人間的なこと、また行なうであらう人間的なこと、それらすべては、一陣の微風の如何によるのである。というのは、もしこの神的な息吹きが我々の身辺にそよがず、魔法の音色のように我々の唇の上に漂わなかったならば、我々はみないまでに、森林の中を駆けめぐっている動物に違いないからである。」

J・G・ヘルダー『人類史の哲学』

「哲学の全雲塊が、言語論の一滴へと凝縮する。」

L・ヴィトゲンシュタイン『哲学探究』

一

ことばについて語ることは、それ自身がすでに、ことばを使ってなされるといふ点にも示されるように、まるで鏡をへずして我身をみるような、錯綜をきわめるもつとも困難な課題のひとつに数えられるであろう。いや、おそらくは、人間におけるもろもの困難な課題は、実は、すべてことばに由来するのだ、といった方が、正しいかもしれない。ことばは、誰もその背後に遡ることのできない前提であり、所与にとどまる。われわれは、ことばの存在に気づく前から、すでに先反省的にことばを使って生きているのである。したがって、ことばについて語ることは、もともと不可能事をなしていることになるのかもしれない。

ことばについて語ることが困難であるということは、それが精神の全秘密にふれることだからである。本質的に謎である精神の創造的な活動の源泉をたどることは、どこまでも行尽無窮であろう。しかし、とらえがたい精神の活動は、ことばとなって表出される。言語は、精神の何らかの刻印を帯びている。精神とことばとの関連については、すでにアリストテレスが的確に次のように語っている。「音声のうちにある様態は靈魂のうちにある様態の象徴であり、書かれたものは音声のうちにある様態の象徴である。」<sup>1)</sup>ここでアリストテレスは、心と、声に出して語られたものと、文字に書かれたものの三者を挙げ、それぞれ後者が前者のシュンボロンになるといふ記号的関係を指摘している。この点で、ことばを「精神の外化」としてとらえるヘーゲルも、アリストテレスと同じ考えに立っている。ことばこそは、隠れた精神の、知覚可能となった（視られ聴かれうる）直接態である。

ことばは、そのような精神に与えられた翼である。ことばは、精神が世界を駆けめぐるための翼であり、乗り物なのである。精神にとってことばは、千の眼、千の耳、千の手、千の足にもまさるものである。ことばのこのような可能性こそが、世界—内—存在としての人間にはじめて自由を得させるのである。魚にとつては水が、鳥にとつては空がエレメントであるように、人間にとつての、精神にとつてのそれは、ことばに他ならない。ことばを欠けば、精神は失速して大地に墜落し、人間は再びあの森林の生活に舞いもどらねばならなくなるであろう。

二

ことばの限界が世界の限界であるのか、それとも意識の限界であるのか、と

いう問いは、今は問うまい。ヴィトゲンシュタインの提出したこの問いは、たしかに、ことばとは何かを考える以上、避けては通れない問題である。ことばが、世界と釣りあうにしても、意識と重なるにしても、あるいははしないにしても、ことばは、意識と世界との「間」に介在するものであることを、右の問いは見失わせはしないであろうか。「間」の次元は、ことばの問題のみならず、いつも看過されてきた領域であった。<sup>2</sup>人間の経験は、必ず何らか言語的であり、経験の言語性は、ことばの本来の場としての「間」を指し示していると思われる。なぜなら、誤解を恐れずにいえば、経験は、世界と人間との、また精神との総合であり、この総合は「間」の次元でしか成立しないと考えられるからである。

ともあれ、人間はことばによって思考する、思考のオルガンとしてことば以外のものは考えられない、この意見に反対する人はいないであろう。どのような判断・認識であれ、思考は言語的意識、あるいは言語活動と全く無縁であることはできない。言語による思考こそ、まさに精神の労働にふさわしいものであり、それは人間を他の生物一般から分かつ固有のしるしともなる。しかし、よく言われるように、人間は火や道具と同じように、ことばを持ったから、人間となったのではあるまい。ことばをつくり、それを使うようになるためには、人間はすでに人間でなければならぬであろう。人性と言語とは、互いに先後を争うことはできない。ヘーゲルも言ったように、人間はおそらく、はじめから思考したにちがいがなく、そうなる、普遍的な言語形式一般を人類の中に想定せざるをえなくなるであろう。

ことばなくして生きるということは、人間に空気なくして生きよという、理不尽な命令を課すに等しい。ことばは、われわれの生を形づくるその最奥の核のようなものである。これを喪失した状態がどうなるのかを、ちよつと想像してみただけで、日頃思ってもみないその偉大な力もわからうというものである。たとえば、相手に対する命令や要請、非難や称讃を行うにも、あるいは自分の気持ちや考えを伝達したりするにも、ことばがなくては、意思の疎通はまったく計れないであろう。もちろん、簡単な内容のものならば、ことさらことばを要しないこともしばしばあるが、ちよつとこみ入ったものになると、相手に理解させるのに、その内容や状況を的確に説明しうることばをさがして、大汗をかいたりする経験は、誰しもあるであろう。

話し手と聞き手の間のコミュニケーションは、言語的コミュニケーションと

して遂行されるとき、より十全な形をとる。この言語的コミュニケーションによる了解の可能性が、およそ社会と呼ばれるもの一般の基底をなすことは言うまでもないであろう。言語性と社会性とは、やはり同時的、不可分のものと、考えられる。言語は、決してたんに私的次元に尽きることはなく、他方、社会性もまた、決してたんに客観性の次元に求められはしない。この点、レヴィ・ストロースなどの構造主義的人類学が試みているような、未開社会の構造を厳密な言語論の地平から解釈しなおすという方法は、大変注目し得る。言語は社会の成立にもっとも深く関与しており、それは人間存在と社会とを結合する紐帯と言つてよいかもしれない。いみじくもすでに、フンボルトも指摘せるように、言語は根源的に「媒介者」なのである。<sup>3</sup>ことばはどこまでも、個人によって語られ、個人によって聞かれるものでありながら、他方、汎通的な公共性をもち、人と人、人と物、物と物とを結びつけるという意味で、「媒介者」と考えられるのである。ことばは、それが任意の他人によって聞かれるものであるということの特徴のひとつとして点ですでに、共存在の世界をいつも不可分離に予想し、指し示しているのである。

ちよつと道具が、自然に対する人間の労働を媒介するのと同じように、言語は我と汝を人格的に相互に結びつけ、社会的な諸関係のなかに置くのである。ことばは、いわゆる自然的な身体的表現、身ぶり手ぶりといったものを超えて、そういうものでは表現できないような情意、思想、出来事などを伝達する、新たな、きわめて有効な無類の表現手段として、人間相互の理解を深め、また広め、こうして人間の社会性を拡張していく契機となったと考えられる。

### 三

さてしかし、実際に、ことばが発せられる現場にかえって考察を続けることにしよう。何といつても、あることばを語る者は、彼自身を第一の聴取者として聞かせるという事実がすぐに気づかれるであろう。語る者は、他の誰よりも、同時に聴取者としてみずから語るのをまっ先に聞いているのである。聞くことなしに語ることはできない。語ることはこのように、自己再帰的であることを特徴としている。われわれは語りつつ聞き、聞き入りつつ語り出すのである。両者は再帰的、交互的である。ここにいう語りは、しかし、現実には声音を伴わずともかまわない。そのときでもわれわれは、自分が語るのを聞いていることに変わりはない。

こう考えると、われわれは、見ることよりもむしろ、聞くことから開始して

いるのだ、と言えるかもしれない。人間の経験に占める視覚の役割りを軽視するわけではないが、親の語ることばの模倣から学ぶことを始める幼児における経験のあり方を考慮に入れると、その模倣が成り立つのに必要な聴従の根本的な意義は認めてもよい。聞く↓話す↓読む↓書くという順番の中で特に語るのと聞くこととは、一般に、車の両輪としてわれわれの経験を深め、また拡大してくれる。それゆえ、そのような経験の形式は、普遍的に言語的であることは、言うまでもない。というのは、語ることに聞くことの両方において、語られるものも聞かれるものも、ともにことば以外の何ものでもないからである。

さてしかしそれにしても、いったい、ことばとは何であるか、と正面きつて問われると、はたと困却してしまう。それはあまりにも自明のものだからである。ことばは、われわれがそれを使ってさまざまな便宜をうる手段とは考えても、それを、そういう有用性が幅をきかす日常生活の領域外に置き移して、それについて考察を加えるなどということは、ゆめ思ってもみないであろう。ことばは、相手を従がわせたり、意のままに動かしたり、励ましたり威嚇するためにあっても、それを考察するためにあるのではない。われわれはすでに、ことばを使って、ことばと共に生きており、ことばによって予示されている通りに行動しているのであるから、そもそもそういう「ことばとは何か」という問いを發することは、何かきわめて特異なものとならざるをえない。

ことばは、もともと身近にあり、右のような類の問いを不要とする自明性のなかに安らっている。ことばは、人間にとつてもっともよく熟知されたものにも他ならない。しかしそのことは、それが十全に認識されているということの意味してはいない。Bekanntと erkanntとは区別されねばならないのである。われわれが日々これを使ってその便役を享受し、これと共にありながらも、その何たるかを知らない、そのような背理が、ことばをめぐる問いのなかにひそんでいるわけである。われわれは、このようなことばの本質的な諸性格にかんして、たとえ大まかな輪郭にすぎないにしても、以下にいくつか特徴づけてみることにしたい。

#### 四

ことばとわれわれの日常的生との深い結びつきについて、S・I・ハヤカワは印象深く説明している。現代の文明社会に生きるすべての人間はみな、「コトバの中で泳いでいる。新聞の編集者、政治家、セールスマン、ディスク・ジョッキー、コラムニスト、講演家、牧師、仕事の相棒、友人、縁者、妻と子、市況

報告、ダイレクト・メール、書籍、屋外広告——それらは一日中コトバでかれに襲いかかって来る<sup>4)</sup>。ハヤカワによれば、われわれはたえず、尽きることはない「コトバのナイアガラの滝」にさらされているのである。

語る、聞く、読む、書くことにおいて、ことばは次から次へといわば消費されていく。しかしことばの消費は、他の事物の消費と異つて、いくら使つても枯渇するという心配がない。だからでもあるまいが、われわれはおびたしいコトバの洪水の中に身を置いており、そのコトバが伝える無数の情報にたいして、取捨選択を加えて、必要な態度を、あるいは可能な行動をとっているわけである。人間が世界に対してとる態度——認識的であれ行為的であれ——に決定的な影響力を行使しうるのはことばであり、またことばだけである。ことばは、人間的生に深く浸透して、それに意味を与えるものなのである。

それにしても、われわれの發することばの豊富な多様さには、ただあきれるばかりである。ヴィトゲンシュタインは数限りない命題の多様性——それは人間的生および世界の多様性と表裏一体である——にかんして、次のような例を枚挙している。「命令する、そして命令にしたがって行為する——ある対象を熟視し、あるいは計量したとおりに、記述する——ある対象のある記述(素描)によって構成する——ある出来事を報告する——その出来事について推測を行なう——ある仮説を立て、検証する——ある実験の諸結果を表や図によって表現する——物語を創作し、読み——劇を演ずる——輪唱する——謎をとく——冗談をいい、噂をする——算術の応用問題を解く——ある言語を他の言語へ翻訳する——乞う、感謝する、ののしる、挨拶する、祈る<sup>5)</sup>」。

命題の種類には限りというものはないのである。われわれはそのつど、たえず新しいタイプの文や、さまざまな形式の言語ゲームを創出している。母国語を知っているということは、単語や文章をたんに記憶してストックしているということではなく、右の例にもみられるとおり、無限に新しい文を作ったり、またそれをただちに理解する能力によって定義されるのである。このように精神は、有限であることばを、無限に行使しうる、豊かな創造性を特徴とする。

かつてフンボルトは、「言語は既成の成果(Werk)ではなく、一つの活動(Tätigkeit)である。エルゴン<sup>6)</sup>ではなく、エネルゲイア<sup>7)</sup>である」とある。あるいは「言語は死せる所産物(ein todes Erzeugtes)ではなく、むしろ産出活動(Erzeugung)と見なくてはならない」と有名な定式化を語ったとき、彼もまた、言語の不断の創造性に目を向けていたのである。ことばの創造的使

用は、将棋やチェスにも似た面をもっている。つまりそこには、一定の規則（文法規則と遊戯ルール）が厳存するが、局面に応じて有限な素材を無限に組みあわせて展開することができるからである。

## 五

われわれはさらに、ことばの内奥へとつき進んで行かねばならない。まず、ことばは、さしあたり声、あるいは音として現われる。ことばは、人間の発する音声として近づくられる。語ったり、聞いたりしているのは、声としてのことばである。声はことばの運搬具である。声は沈黙と対蹠的である。暗黒の沈黙をつき破って声が発される。ことばは、音声を欠けば、再び沈黙の無へ落ちこんでしまう。そのような声は、唇の息吹きであり、精妙にふるえる外気である。声という現象は、風という現象とまずは同じものである。風がものを運ぶように、声はことばを運び、思想を伝える。声は人間の唇にそよぐ一陣の風である。唇が食物を摂取するためだけでなく、また呼吸とも無関係に外界に向かって息を吹き出したとき、人間はあゝ森の自然から訣別するきっかけをつかんだのである。声は四大（火・水・土・空気）を構成する一要素である。声は人間の、文字どおり胸奥より発せられ、思想をのせて軽やかに伝播していく。ことばを語ることは、思想を音声形式に仮託することに他ならない。われわれから声が奪われれば、思想はその出口を失い、精神は翼を折られたも同然である。

精神の知的な営みは、そのものとしては経過とともに跡形もなく失われてゆく。しかし知性が音声に結びついたとき、はじめて内的なものが外化され、感覚によって知覚される形式を備えるにいたった、と考えられる。この意味において、声を発することと声を聞くことは、ことばの成立にもっとも深く関係している。こうして、それ以前には時間の流れの中で、痕跡を残さずにただ生成消滅するのみであった思考が、一定の音声形式と結合した瞬間、はじめて、空しく消費されてきた思考のエネルギーは、声という表現媒体に定着化をみ、表現されることをとおして、さらに明晰さを獲得できることになった、と考えられる。つまり、音声記号によって、不定形の思想に、何らかの形が与えられたわけである。

しかし、「知性と音の結合」——これは、あらゆる結合のなかでも、もっとも不思議な結合である、と言わざるをえない。なぜなら、両者は、その本性上いかなる類似点もないにもかかわらず、ほとんど自然的とさえみえる強固な結

びつきを発揮しているからである。思想や概念、あるいは意味といったものは、一定の音声という衣をまとって表示されている。もちろんそれらは、別様の着物をまとうことを排除しはしないが、そこには、たんなる偶然や恣意を越えた、なにか動かしがたい安定性が認められるのである。

さて、ことばを語り、そして聞くという、まことに平凡、陳腐ともみえる事実は、現象的には、どう説明されるであろう。その過程を説明するのに諸学を総動員しなければ解明できないほど、ここには実にさまざまの経過が入りこんでいる。否、ことばは、そもそもあらゆるものがそこに流入し、交叉し、溶融しあっている一大特異点なのである。自然人類学の最新の成果によれば、それは驚嘆すべきメカニズムを備えている。それによると、人類の脳は、前頭葉と側頭葉にそれぞれ働きのちがう言語中枢があり、両者が連絡されてはじめて、ことばによるコミュニケーションが可能になる、といわれている。まず発声の機構にかんじていえば、前頭葉に運動性言語中枢（プロ力中枢）と呼ばれるものがあって、それが、音声を調節する声帯の開閉、空気を送り出す肺の力、音節をつくり出す舌や唇の運動など、関係の諸器官をたくみにコントロールしている。聞くことにかかわるものとして側頭葉に聴覚性言語中枢というのがあって、耳に入ってきた音波を分析し、ことばとして理解するという役目をもつ、とされている。両方のどちらかに支障をきたしても、いわゆる失語症になるといわれる。いずれにしても、ことばを聞いたり、声に出したりすることは、意識してやろうとしても決してできないような、複雑精妙な機構が関与していることがわかる。

ソシュールは、人間の言語活動の過程を次のように説明してみせる。まずはじめに、語り手の脳には概念とよばれる意識事実があつて、それからそれにみあう聴覚的イメージが連想的に喚起され（心理的プロセス）、そのイメージと相関的な刺激が脳から発声器官に送られて現実に発声され（生理的プロセス）、語り手の口から聞き手の耳へ音波となって伝播し（物理的プロセス）、次に今度は、聞き手の側に今と逆の順序をたどって同じプロセスが続行される、というわけである。ソシュールは言語的コミュニケーションの経過を、意識的⇄心理的⇄生理的⇄物理的の循環としてとらえたが、それは端的にいうと、精神が音波という物理的な形象性を帯びるプロセスの説明なのである。このことからわかるように、ことばはまさに、精神と自然とが互いにせめぎあいつつ交叉しあう結節点、あるいは特異点として特徴づけられる。

## 六

フンボルトが喝破したごとく、「概念を音声によって表示する」——これこそ精神が見出したもののなかで、もつとも偉大にして、もつとも意味深い発見であつたらう。精神がとらえた概念の意味は、先に記した意識的—心理的—生理的—物理的な過程を順次経過して、最終的に外気を振動する音声へといわば、メタモルフォーゼするのである。精神は、具体的な音声との結びつきによって始めて、自己の不定形な思想を流しこむ定形の鑄型を手に入れたのである。

こうして確実な表現手段となつた音声は、知的活動のたんなる補助手段の地位に甘んずるのではなく、むしろ反対に、知性の活動は、それが結びついて具体的な音声を媒介しなければ成立しえないという優位性さえ、音声には特記されるのである。しかし基本的にはやはり音声は、思想や概念を盛る容器として、精神に駆使されるべく、精神の祭壇に献じられた供物なのである。

精神の活動を表現する媒体としては、たしかに音声形式は精神の息吹き、あるいは発露として、もつとも精神にふさわしいものであろう。なぜなら音声は、四大のなかでも、ただひとつ非物質的、不可視の存在であり、それは精神が己れを仮託する（乗りうつる）のに本性上、もつとも適合する質料である、とみなされうるからである。その軽快な質料性は、精神の闊達な自由さと、内的なかそけきひそやかさとを象徴するかのようでもある。

ソシュールの言を借りれば、概念と聴覚的イマージュは、一枚の紙の表と裏の関係のように、互いに切り離すことはできない。ソシュールの著名になつた定式によると、「シニフィアン」(le signifiant)、すなわち「能記」と、「シニフィエ」(le signifié)、すなわち「所記」という区別が一般に「記号」に認められる。この区別にもとづいて、シニフィアンに聴覚的イマージュが、そしてシニフィエには概念がわり当てられた。言語記号には必ずこの意味するものとしてのシニフィアンと、意味されるものとしてのシニフィエとの両契機が含まれており、われわれは、前者を通じて、ただちに後者、すなわちシニフィエの理解に導かれるのである。こうしてことばは、その他の物理的現象と同值的、並列的なものでありながらも、それとは全く異つた地位を得、いわゆる記号として機能するようになった。まさに記号とは、自分以外の何かを表示するものだからである。そして音声や文字を材料とする記号において、それ以外のものだから記号に対応するものが、通常、意味と呼ばれてきたのである。

たしかに、一定の語音を聞くと、われわれは、ある観念なり事物を想起する。

したがって音声記号の認知は、たんなる感性的知覚の段階で終わりはず、そこにはさらに、意味を発見する精神の意味志向が重層している、と考えられる。一定の語音には一定の意味が対応し、ちがった音によってちがった意味が表示される。しかしソシュールが注意しているように、ことばの能記と所記のあいだには、両者を結びつける自然的類縁性は、どこにも見当らない。意味するものを、意味されるものに結びつけるきずなは、実は根本的に恣意的なのである。ソシュールの教えによれば、「言語記号は恣意的である」<sup>10)</sup>。ある観念とある語音とは、恣意的に結びつくにすぎず、それゆえそれは必然的ではありえないし、また、ア・プリアリなものでもありえない。

もちろん、能記と所記との一対一対応の関係を単純に集積すれば、ある言語体系が成立する、というように考えることはできない。なぜならことばは、各々が独立に言語体系に垂直に関係づけられるのではなく、むしろ他のことばとの示差的な横のつながりによってある言語体系に共属しあうものだからである。あることばが他のことばから明確に区別された位置づけを得るのは、それが他の無数の語群と示差的なしかたで共存可能であることに基づくのである。したがって、言語記号は恣意的であるにもかかわらず、何か勝手に変えることを許さない安定性を保っているのは、記号間の示差的な関連が描きだしている特定の配置のしかたによる、と言えらるであらう。こうしてソシュールは、「恣意的と示差的とは、二つの相関的性質である」<sup>11)</sup>とみなしたのである。

ことばにおいて重要なのは、ソシュールの指摘にもあるように、音そのものではなく、そのことばを他のことばから区別せしめる音声的差異である。ことばの体系は、この差異の体系としてのみ可能である。ことばは、他の音との差異を示すことによつてはじめて、体系の中に特定の位置をさすけられる。ことばを習得すること、ことばの意味を理解することは、ことばの示す差異を受け入れることによつて可能となる。ことばは、恣意的な結合と示差的な排除によつて成立しているものなのである。あるひとつのことばは、それをとりまく無数の語を背後にひきずりつつ、それを地にしてみ浮かびあがることのできた図のようなものである。ことばは、全体との示差的連関から規定されているという意味では、言語体系は、はじめからある全体的秩序をなしているようにもみえる。

しかし、観念と音との間には恣意的な結びつき以外何もないのに、ある音を聞いて即座にそのことばの意味を解し、またどんな人間も自分の言いたいこと

は、概ね自由に伝えられるというのは、やはり不思議である。とくに外国語とちがって母国語のばあいには、その結びつきは恣意的というよりは、反対に、自然的と感じられているであろう。この疑問に対してはやはり、概念と音との一定の結合は、母国語のなかで自然に培われる習慣的連合を基礎とする、と答えらるべきであろう。ことばをマスターするというのは、結合の恣意性が自明な自然性へと移行した状態をさすのである。そして習慣の形成によって、この結合は、はじめからそれ以外の結合のしかたがありえなかつたような必然性さえ帯びてくるのである。

## 七

それにしても、ことばにとって音声とはいったい、何であろうか。発せられる音声は、人間の雄弁な表情にも似て、一定の音調、アクセント、抑揚などによって生き生きと彩られている。そのような種々の装飾を帯びた音声は、また文字にくらべてはるかに多くのものを伝達できる。この装飾はあつてもなくてもよいといった、音声の付属物ではなく、それが伝達する内容にかんして決定的な影響力を及ぼしている。たとえば内容的には同じことが含意されても、語調をすっかり改めたりすると、反対の意味あいになったりする。またアクセントは、同音異語の多い日本語にとってはとくにそうであるが、その置き方ひとつによって、全く別のものを意味することができ。「ハシ」ということばは、アクセントの打ち方によって、「橋」にも「箸」にも、あるいは「端」にもなるのである。

文字言語（書きことば）は、音声言語（話しことば）がもっている複雑微妙なニュアンスをかもしだすことは不可能である。文字は表現力の豊かさを失っているだけでなく、あふれるような生氣においても話しことばに劣るであろう。文字に書き写されるのは音色であるから、ことばに生命を与えるあの音調を遺憾ながら伝えることはできない。ところが音声言語は、音調ひとつで意義を変更することも意のままである。とはいえ文字言語は、音声言語を目に見える形象に定着させるものであり、語るつど消え去るのみであった音声に対し、それを長く保持して記録するという、計りしれない長所をもっている。音調を欠いた文字は平板であり個性を失ってはいても、この点は文字の徳として称えらるべきであろう。

音声を発することは、「精神の労働」というには少し軽作業にすぎるのであるか。精神はその思想を伝えるために、今述べたようないなんな装飾を音声に

ほどこしたとしても、ほんのわずかの労力しか消費しない。しかるに発せられた、たった一つの語でも、広大な現実領域を代表する記号としては完璧なのである。この意味において、ことばは、自然は無駄をしないという最少の法則の見事な典型たりうるものを備えている。ことばを語ることも、文字を綴ることも、最少の努力で最大の効果を挙げていることになる。人間は動物とちがって、事物に反応せず意味に反応するという方にならつて言えば、人間は事物を操るのではなく、何よりも象徴を操る存在だと、みなしうる。

何といつても音声には生命が宿り、不可思議なエネルギーにあふれている。ことばのもつ呪術性、宗教性、音楽性といったものは、たんに読まれ書かれるだけのことばよりも、語られ聞かれる話しことばの側に、より根本的にみとめられる。たとえば延喜式に制定されている大祓の祝詞の莊重にして厳肅な響きは、それを聞く者の心に、ある壮大なイメージを喚起しつつ、くさぐさの罪を浄化する力を実感させる。あるいは柿本人麻呂の数々の挽歌の絶唱は、本当に死の厳しさと死の哀しみをそこに顕現させている。詩もまた、朗じられてはじめてその真価を発揮するものである。ことばは古代では、こういう霊力をもつものとしてまさに言霊として扱われてきたのである。

## 八

音声のもつ根本的な意義について若干の考察を続けてきたが、ここで次のような疑問を呈してみよう。それは、同じことばを発声しても、個人に応じてべて音質的には異なるはずであるが、それにも拘らず、それを同じものとして把握できるのはなぜか、という問いである。語られることばは、それぞれ語る個人の個性的特徴を示している、音色、高低、語調といった点で異なる音質から成っているが、にもかかわらず、この実質的差異は聞き手の側で解消され、同じものとして受けとられることができるのはなぜであろうか。先に示した言語記号の恣意性との関連で論じた示差性は、いまとりあげている音質上の差異とはちがう。示差的存在であるということは、基本的には個々人の声の質とは無縁な音韻構造上に由来する差異を意味している。さてこの音質上のちがいは、その外観上の多様さにもかかわらず、容易に乗り越えられ、語り手も聞き手も同じひとつのことばを志向し、共有する。そのためには、異った諸音質の感覚的多様性をうけとめつつ、その中からゲシュタルト的に同一のものを把握する働きがなければならない。フッサールの言えば、それは多様な射映面を通じて現出する対象において、インヴァリアントな何かをとらえる同一化の働きの如



る。ことばのあるところのみ、人間があり、世界があり、そして歴史がある。見失われてきたことばのもつ根源的で、本質的な力を、われわれは再び取りもどさなければならぬ。人間を支配し貫ぬくことばは、もはやたんに人間的なものとは言い難い。ことばは、人間に贈られたもののうちで、最も偉大な財宝であることを、われわれは熟慮しなければならぬ。

## 注

- (1) 『命題論』第一章 16a3-4 『アリストテレス全集』第一巻、八五頁。
- (2) 拙稿『現出の諸問題—(二)—』(『研究報告第二十九号』) 参照。
- (3) 『言語研究とフンボルト』泉井久之助、三二三頁。
- (4) 『思考と行動における言語』S・I・ハヤカワ(大久保忠利訳)、16ページ。
- (5) 『哲学探究』L・ヴィトゲンシュタイン(全集第八巻、藤本隆志訳) 32ページ—33ページ。
- (6) 『言語研究とフンボルト』三二二頁。
- (7) 『新しい人類進化学』埴原和郎、132ページ以下参照。
- (8) 『一般言語学講義』ソシユール(小林英夫訳)、二二三頁以下参照。
- (9) 同右書、九七頁参照。
- (10) 同右書、九八頁。
- (11) 同右書、一六五頁。
- (12) 『認識論の根本問題』G・プラウス(観山、訓覇共訳) 四七頁以下参照。
- (13) 現象、および現出概念の再検討とその説明にかんしては、拙稿『現出の諸問題』(一)、(二)(『研究報告』第二十八、二十九号)を参照。

(昭和五十九年九月十七日受理)

(宇部工業高等学校社会教室)